私のフォトアルバムから見た芹沢長介先生

平 口 哲 夫

はじめに

芹沢長介先生ご逝去の年に発行された『考古学ジャーナル』No.546「特集 芹沢長介追悼号」に、私は「岩戸 1967 以後の芹沢長介先生と旧石器論争」と題して所感を述べた（平口，2006）。今回は、私のアルバムから学部・院生時代に参加した、芹沢先生関係の旧石器時代・縄文時代草創期遺跡発掘調査の際に撮影した写真を何枚か選んで掲載し、前回の記述の補足をする。

1. 大分県岩戸遺跡 1967

1967 年8月 26 日～9月4日、大分県大野郡清川村（現・豊後大野市）の岩戸遺跡発掘調査に参加。私が大学 3 年生のときのことで、旧石器時代遺跡の発掘調査に参加したのはこれが最初であり、旧石器研究をする切っ掛けとなった。

この写真は遺跡付近の橋の上で撮影したもので、後列右から二番目が芹沢先生、その右が坂田邦洋氏（別府大学）、左が岩尾松美氏（別府大学）、前列右端が富来誠勝氏（別府大学）、前列左端が筆者、その右が柳元悦氏（玉川大学）。私が愛用するアサヒペンタックスでセルフタイマーにより撮影。この発掘調査は東北大学考古学研究室と別府大学考古学研究室との共同で実施され、東北大学からは芹沢先生と私のほか、横山英介氏と石神悟氏が参加していたが、この写真に両氏は写っていない。

この時以来、芹沢先生が遺跡の遠景などを撮りに行かれるとき、カバン持ちをすることが何度かあり、先生の代わりにシャッターを押すこともあった。1996 年 12 月 21・22 日に東北福祉大学で開催された第 10 回東北日本の旧石器文化を語る会のときだったか、先生が講演中、「平口君は顔に似合わず写真を撮るのがうまい」と一言余計なことを仰って、会場の笑いを呼んだことがある。顔のことはともかく、めったに先生からお褒めに預かることはなかったので光栄に思ったものの、いつか「芹沢先生はお顔に似合わず…」とお返しをして上げたいと思いつつ、機会を失ってしまったのは残念。

2. 新潟県田沢遺跡 1968

1968 年 10 月、大学4年生のときに新潟県中里村（現・十日町市）田沢遺跡の発掘調査に参加した。この写真は伊東信雄先生が撮影してくださったもので、芹沢先生が遺物出土状況の撮影をしている傍らで立って見ているのが私である。

この発掘調査中、シートに置かれたカメラをうっかり跨いでしまって、芹沢先生から大目玉を喰らった。こういうことについては、先生はとても厳しい態度をとられた。

3. 群馬県岩宿遺跡 1970

修士課程2年のとき、1970 年3から4月にかけて実施された群馬県新田郡笠懸町（現・みどり市）岩宿遺跡 B 地点・D 地点発掘調査に参加。この写真は D 地点付近で撮ったもの。前から2列目の左端が相沢忠洋氏、その右が芹沢先生。これから旧石器研究で卒論に取り組みたいと希望する4年生を盛り立てようと、先輩たちの配慮で最前列左側に小林博昭氏と岡村

『斬新考古』第 3 号から転載、改訂（写真の一部を原稿と同じカラー版に変更）

道雄氏が意気揚々と並び、その右に加藤道夫氏と八巻正文氏、最後列の中央に筆者、その左方に西脇敏郎氏、右方の少し高い位置に横山英介氏、その前に戸田正勝氏が写っている。

芹沢先生は、岩宿遺跡の発見者である相沢氏をとても大切にしておられた。その姿勢を見習って、弟子たちも遺跡・遺物を発見したアマチュア考古学者に敬意を払って接してきたのだが、それが裏目に出たのが「旧石器捏造事件」である。

4. 鹿児島県上場遺跡 1971

この写真は、博士課程1年の1971年8月12～20日に実施された鹿児島県出水市上場遺跡発掘調査の現場で撮影したもの。最前列左から 2 番目が芹沢先生、その右が池水寛治氏（出水高校教諭）、2 列目左端が横山英介氏、その右が筆者。カメラが2台設定されて撮影されたので、私のカメラのほうを見ている人は視線が私と同じになっている。宿泊は小学校の分校を利用。出水高校考古学部の高校生・先輩たちは合宿に慣れており、炊事は女子高生が担当。炎天下で発掘をする者にとっては粗食すぎないかと芹沢先生が心配なさり、調査期間の途中でポケットマネーを提供なさったけれども、ぜんぜん改善されなかった。

往路、東京から別府まではフェリーに乗ったのであるが、台風の影響で海が荒れ、ひどく船酔いしてしまい、どうなることかと心配したが、九州に上陸してから次第に回復し、発掘調査には差し支えなく済んだのは幸いであった。

5. 福島県塩坪遺跡 1971

1971年9月、福島県耶蘇郡高郷村（現・喜多方市高郷町）塩坪遺跡の発掘に参加。ナイフ形石器に伴って、平行線状に何本もの擦痕がついた台石（砥石？）が出土している。この写真は、芹沢先生が石器の出土状況を撮影している様子を撮ったもの。

6. 長野県柏垂遺跡 1972

1972 年8月、長野県南佐久郡川上村柏垂遺跡の発掘調査に参加。芹沢先生関係の発掘調査に参加すると、先生がこれまでの研究生活で交流して来られた方々とお会いする機会に恵まれる。細石刃の発見に貢献した由井一昭氏もそのうちの一人である。

7. 北海道タチカルシュナイ遺跡 1972

1972 年8月、北海道紋別郡遠軽町タチカルシュナイ遺跡の発掘調査に参加。この発掘調査は、芹沢先生と吉崎昌一先生の指導の下、北海道大学、東北大学、明治大学などの学生・院生などが参加。また、陸上自衛隊遠軽駐屯地から派遣された自衛隊員の協力も得て行われた。

上掲の写真には、若い自衛隊員と一緒に発掘作業をする筆者（博士課程 2 年）が写っている。自衛隊員たちは、社会教育体験の一貫として参加したのであるが、初体験の発掘調査であるにも拘らず、当方の指示に忠実に従い、まるで地雷除去の訓練のごとく慎重に作業を進めてくれた。自衛隊員たちの昼食は駐屯地から運び込まれたもので、私たちの食べるものよりもずっと栄養豊かで、オリンピック強化選手並みのカロリーとのこと。

ある夜、吉崎先生に誘われて、先生が宿泊なさっているホテルのラウンジでウイスキーを飲みながら四方山話をしていたら、つい飲み過ぎて二日酔いになり、まる一日現場に出ることができないという大失態をしてしまった。芹沢先生からは直接

何もお叱りを受けなかったが、後輩には白い目で見る人もいて、まったく面目ないことであった。

8. 栃木県星野遺跡 1973

私が栃木県栃木市星野遺跡の発掘調査に参加したのは、1967 年 11 月に実施された第 3 次調査からである。上掲の写真は、博士課程 3 年のとき、1973 年 3 月から4月にかけて行われた第 4 次調査の際に第 3 地点Ｅトレンチの前で撮ったもの。前列右から 3 人目が芹沢先生、その右が小林博昭氏、右端が筆者、その右二人目が岡村道雄氏。

第 3 次調査のとき、休憩時間にトイレから戻ってくると、芹沢先生や横山氏らが集まって、石灰岩製の石器があるとかないとか、盛んに話し合っている。その話題になっている「石器」は、どこかで見たような感じがするので、ハッとした。それは宿舎に利用していた寺院から歩いて来たときに、石灰岩の砂利道で見つけた、いわゆる「ダンプ石器」だったからである。これを作業衣の胸ポケットに入れて発掘をしていたのだが、暑くなったので、トレンチの上に設けられた土上げ用の滑車装置の丸木に作業衣を掛けておいたところ、その「ダンプ石器」がポケットから抜け出てトレンチの中に落ちていたのを誰かが見つけたらしい。「それは私が砂利道で拾ったものです」と恐る恐る申上げるや、芹沢先生は私の左腹を軽く拳で小突いて一件落着。この出来事は、どこかで拾ったものを身につけて発掘に参加してはいけないという教訓になった。

『栃木市星野遺跡―第2次発掘調査報告―』(芹沢, 1969)で提示された、板状石核の剥離過程や板状剥片から斜軸尖頭器が作られる過程を模式図でどのように示すかということを、芹沢先生と横山英介氏が相談しているのを傍らで伺っていて、「では、私が試みに」と申し上げて描いてみたのをお見せしたら、「平口君は意外と上手いじゃないか」と喜んでくださった。その模式図は、「前期旧石器に関する諸問題」第四紀研究第 10 巻第4号(芹沢, 1971)Fig.4に採用されている。

なお、片平丁の文学部 10 号館2階にあった芹沢先生の教官室に文献を借りに伺っているとき、先生がいきなり窓の外に向かって「君たちダメじゃないか！ その原石は私が実験用に持ってきたものだ。元の通りにせよ！」とお怒りになった。当時、遺物整理室として使用していた元車庫の前で二、三の人が星野遺跡周辺で採取したチャート原石を勝手に割っていたのである。たまたま私のそばにいた藤沼邦彦氏が、「平口君、芹沢先生に叱られたら絶対口答えしてはいけないよ。5 分もすればケロッとして根に持たないから」と、あとでこっそり注意してくれた。

9. 岩手県碁石遺跡 1973

1973 年6月 30 日～7月6日に行われた岩手県大船渡市碁石遺跡の発掘調査に参加。この写真の最前列に座っているのは千葉英一氏、立っているのは右から芹沢先生、黒川利司氏、岡村道雄氏、戸田正勝氏、筆者。二人の女性は地元の作業員。

調査期間中に宿泊した碁石荘について、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の後、どうなったかと心配になりインターネットで検索したところ、震災前に建て直されて「ごいし荘」と改名したようだが、その「ごいし荘」は「震災の為 休業中」と記されていた。この写真に写っている女性二人はご無事なのだろうか。

この遺跡からは、あたかも細石刃の両極石核のような形をしたピエスエスキーユ相当の石器が多数出土している。この石器は、石片を楔のように使用した結果、両面・両極に上下方向の剥離痕が生じたものと考えられるので、「楔形石器」と呼称することにした。

この遺跡は、学部・大学院生時代に参加した芹沢先生関係の旧石器時代遺跡発掘調査としては最後の例となった。

おわりに

2009 年9月6、岩宿博物館で開催された 2009 年度岩宿大学第 3 講として、私は「岩宿 1949 以降の芹沢先生と旧石器時代研究」と題する講演をした。その際に用いたパワーポイントのスライド写真は、主として私のアルバムやフィルムをスキャナーでパソコンに取り込んで作成したものである。本稿に掲載した写真は、そのデジタル化したデータを利用している。残念ながら、1970 年 10 月と翌年1月に参加した栃木県向山遺跡発掘調査の際に撮影した写真については手元に見つからなかったので、紹介しなかった。

東北大学の学生・院生だったときの恩師、伊東信雄先生と芹沢先生のおかげで、時代的にも地域的にも多様な遺跡の踏査や発掘調査を体験し、特に芹沢先生の場合、北海道から九州までの各地における調査に参加することができた。これはとても良い経験になったと思う。

『斬新考古』第 3 号から転載、改訂(写真の一部を原稿と同じカラー版に変更)